

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520255

研究課題名（和文） 虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究

研究課題名（英文） A comparative study of narrative cognition in fictional genres

研究代表者

森本 浩一（MORIMOTO KOICHI）

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20182264

研究成果の概要：本研究は、文学的虚構から出発して、虚構の基本性質やその受容のされ方を明らかにしようとする一連の研究の一部である。ここでは虚構の物語性に焦点をあて、物語世界は「物語的他者」の一貫したふるまいを通じて認知されるという基本仮説（モデル）のもと、様々なジャンルの虚構を比較・分類した。さらにその知見に基づいて従来の物語分析カテゴリー（語り手、視点、人物など）を組織的に再解釈することを試みた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	420,000	3,420,000

研究分野：文学論

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：物語，ジャンル，メディア

1. 研究開始当初の背景

研究代表者（以下「代表者」）は、哲学（特に言語哲学）および文学の理論（ジャンル論、隠喩論等）に関して研究を続けてきた。哲学と文学の境界領域の諸問題を理論的に探究し、そこから思考し伝達する存在者である人間のあり様を見極めることがライフスパンでの研究テーマである。仕事の詳細は、<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~xkc-m2rt/>で示している。

代表者は、この文脈において、ここ 10 年ほど「虚構」の本質をめぐる考察を続けており、その関連で以下の 2 件の科学研究費補助金助成を受けた。本補助金研究（「虚構にお

ける物語認知の比較ジャンル論的研究」）は、それらの継続として研究の深化をはかろうとするものである。2 件の内容を略述する。

(1) 文学的虚構の基本性質に関する研究（平成 12～13 年，基盤研究(c)(2)，課題番号:12610568)

本研究は代表者の論文「虚構の発話の基本性格」（『東北大学文学部研究年報』第 47 号（1998 年），327-348 頁）を出発点とするもので、虚構としての文学の基本性質を、「関連性理論」を中心とした認知的語用論（コミュニケーションの理論）を基軸としながら、文学理論や言語哲学の成果を取り込みつつ解

明することを目的とした。同時に、日本認知科学会「文学と認知・コンピュータ」研究分科会との連携などを通じて、認知科学的観点からの虚構理論の動向について知見を得、研究の深化に役立てた。報告書では、虚構の意味論的・語用論的な性質を明確化すると同時に、現実言及と虚構との根本的な差異を生み出す「存在論的コミットメント」の問題に論及した。

(2) 虚構の認知的効果および社会的機能に関する研究(平成16~17年, 基盤(c), 課題番号:16520198)

本研究では、主題を「虚構」一般に拡大し、特に人間の認知における「現実」と「虚構」の差異および両者の絡み合いを明らかにしようと試みた。虚構は広義の「メタ表象」の一種であり、そこで働く表象の操作は「スコープ・シンタクス」(J. Tooby & L. Cosmides)によって説明される。メタ表象は、いわゆる「心の理論」や計画・仮想など現実のコミュニケーション状況でも基幹的な役割を演じる。虚構は、真偽性を留保された「認知的ファイアウォール」のもとでのシミュレーションであり、しかも表象が全域的に現実から「分離」されるところにその特徴がある。しかしこの論理的な「分離」を前提とした上で、両者は深く絡み合っている。再現としての虚構の表象が現実への連想を促すだけでなく、社会的に流通する情報の多くは様々な程度において「虚構的な」表象を含んでいる。切迫した真偽性判断が要求される文脈以外において、人間はこうした混在に対して、警戒しつつも「無頓着」なスタンスを取る。それは認知的なコストという観点からして合理的な選択である。

2. 研究の目的

本研究は、「1」に記した諸研究を引き継ぎ、虚構の「物語」がどのように経験されるか、その基本的メカニズムを明らかにすることを目的とする。

過去の研究において、表現としての虚構を論じる場合、内容・形式の両面において「物語」という観点からの検討が必要であることが痛感された。物語とは、最広義には因果関係で結びつけられた出来事連鎖の表象であり、虚構に限らず、報道や歴史記述から日常会話における断片的なエピソード叙述にまで、浸透している。出来事を物語的に表象することは、人間にとって認識の基本形式のひとつである。

ところで、現実経験においては、直接知覚や記述的知識のように非物語的な表象が重要性を持ち、物語は部分的要因に過ぎない。対して虚構の物語は、全域的にメタ表象のスコープをかけられた特異な表象である。この点

に鑑みると、出来事連鎖としての物語一般の成立機序を考えるには、まず虚構の物語に焦点を当てること有益であると思われる。なおここで言う成立機序とは、従来の研究の文脈から明らかなように、物語が受け手に認知されるメカニズムである。表現それ自体は、受け手によって解釈され物語世界の表象を誘導するための「手がかり」に過ぎない。個々の物語作品やテキストに関する規範的評価や社会的・歴史的な成立過程の問題もここでは取り扱わない。

こうした点で、本研究での問いは哲学的であり、いわゆる物語論(ナラトロジー)の中でも最も抽象的な問題に関心を向けるものである。そうしたレベルにおいて、虚構の物語の認知をどう論じることができるのか、そもそも出発点においてどのような観点を設定すべきかを含めて検討することが、ここでの課題となる。

3. 研究の方法

本研究は文学理論、哲学・美学、認知研究にまたがる人文学的な研究であり、実際の研究は、既存研究の検討や近接領域の研究者との討議に基づくものとなる。

「2」の目的を実現するための方法を、研究の方向性に関わる事項と具体的な実践に関わる事項に分けて述べる。

(1) 研究の方向性

課題タイトルでも示すように、本研究は「比較ジャンル論的」方法を取る。このことも、先の科研費研究の中で必要性が認められた点である。文学であれ映画であれ、個別作品を受容したり分析したりする場合、当該ジャンルの存在は自明のこととして前提されている。他方、どのようなジャンルにおいても、それが物語として表象される限り、広い意味で「語られたもの」として知覚され受容されている。物語は、明らかに超ジャンルの現象である。そうであるとすれば、個々のジャンルの作品経験において観察される物語認知のあり方を比較・分類することで、物語認知一般を規定するものが何であるかもおのずと析出されてくるものと考えられる。これは物語ジャンルの「分類」の試みともなる。またジャンルとは、知覚され受容される仕方の違いに基づくものであるとすれば、既にアリストテレスが『詩学』で触れたように、作品が作られる媒体(メディア)がジャンルの差異に関係していることは言うまでもない。メディア論的な考察が要請される所以である。

(2) 具体的実践

いわゆる物語論における先行研究としては、D.Hermanの認知主義的研究、M.-L.Ryan

のメディア論的研究等に注目する。ただし本研究の基本的スタンスは「物語の哲学」に属するものであり、これまでの科研費研究と同様、哲学的なモデルを基軸として全体包括的な見取り図を描くことを目指す。この点では、代表者の過去の哲学研究がベースとなる。

他方、(1)で述べた比較ジャンル論的考察のためには、典型的な作品例を集めて比較検討することが必要となる。物語的な虚構のジャンルを、仮に大・中・小の三段階で考えてみれば、まず文学・映画・舞台芸術のような、メディアの差異に基づく「大ジャンル」の区分が可能であり、それぞれが、例えば文学における叙事詩・民話・近代小説などの「中ジャンル」に分かたれ、さらに小説が、記述色の強い歴史小説から一人称的独白にいたる「小ジャンル」に細分される。もちろんこれは伝統的な作品論的見地からの区別であるが、これを出発点における参照枠としつつ、物語認知の差異に着目しながらジャンルの再分節化を試みてゆくことが重要である。

メディア研究という面からは、これを専門とする研究者との討議も欠かせない。幸い代表者の所属機関の情報科学研究科にはメディア研究部門が存在する。ここの連繫によって知見を深めてゆくことは、研究実践において意義のあるものとなるであろう。

4. 研究成果

本研究の成果を以下に示す。

(1) 観点の設定——物語世界とパースペクティブ

白紙の上に一本の横線が引かれ、その線に近い位置に小さな点が二つ打ってある。この単純な図を「手がかり」として、私は二人の人物が村から町へ夕暮れの道を急いでいる物語的情景を想像することができる。その際に重要なのは、この想像には必然的に二人の行為が生起する「物語世界」の表象が伴っていることである。

ハーマンは、「物語」(narrative)の基本特徴として、(a)状況埋め込み性 (situatedness)、(b)出来事継起 (Event sequencing)、(c)世界制作／世界の断裂 (Worldmaking/world disruption)、(d)性状表象 (What it's like) の四点を挙げている (David Herman, *Basic Elements of Narrative*, Wiley-Blackwell, 2009) が、(b)(c)は筋の構造にかかわる物語の骨格的特徴で、(d)は人物描写の重要性を指摘するものである。また(c)は、構造化された出来事継起が「世界」を作り出すことでもある点を指摘している。このように物語は、人物・筋 (出来事連鎖)・世界という三つの要素から構成されるが、これらは単に情報 (データ) として接合されているのではなく、人物の行為 (出来事) を「通じて」、より正確

には人物の行為「として」世界が表象されるような仕方で、不可分に結びついている。物語認知とは、ある記号断片からそのような世界表象へと誘導されることである。

科学的「記述」(description)と対比すると「物語」の特徴が浮き彫りになる。通常「記述」は文脈・状況に依存しないことを自ら顕示するのに対して、物語はむしろ表現の選択を制約する条件 (フレーム) を自覚的に利用することで成立する (ハーマンの(a))。同様に、「記述」は普遍性・中立性を課せられるのに対して、物語はその世界が誰かの視点 (パースペクティブ) から見られ語られたものであることをおのずから示している。物語認知は、記号断片を、受け手が「誰かのパースペクティブに現れたもの」として引き受けることによって成立する。これは、現象学で言う「自己移入」の構造と同じものである。そこで本研究では、まずフッサール哲学における自己移入論を参照することによって、物語認知の基本モデルを提案する。

(2) フッサールの自己移入論に基づく物語認知モデル

① フッサールの自己移入論

フッサールの後期認識論においてこの問題が扱われる筋道は、およそ次のようなものである。知覚的に対象を認識する場合、知覚されているのは私の視点から見える一面だけである (射映)。しかし対象が一個の存在者として認識されるには、他の様々な知覚的な現れが「可能的」に把握されていなくてはならない。また対象は他の事物全体の中のひとつの存在者として把握される。対象の内と外に広がるこうした可能性の契機を「内部地平」「外部地平」と呼ぶ。さらにそのつどの外部地平は、地平の地平としての「世界」の一断面として捉えられている。こうした認識の「地平」的構成が可能であるのは、フッサールによれば、本来自己固有の視点しか持たない私が、同時に「今ここ」にはない他者の視点に立つことができるからである。私が自己の視点を他者の視点へと移し入れることを「自己移入」と呼ぶ。自己移入に基づく可能的な他者の視点と自己の現実的視点とを総合することで、「われわれ」が共有する客観的なひとつの世界が構成される。自己移入こそが、個々の存在者とそれを包括する世界とが不可分の形で私の意識に立ち現れるための基本原理なのである。しかし他方、私はあくまで私の意識の流れを経験するだけである。自己移入が成立するためには、私は自己の意識の中で他者を発見しなければならない。フッサールによれば、私はまず第一に自分自身の身体を「運動感覚」の座として覚知し、それと類比可能なものとして他者の身

体を発見する。これが自己移入の宛先となる。では他者の身体はどのようにして見いだされるのか。フッサールは次のように述べている。「経験される他者の身体が、現実継続的に自らを身体として示すのは、変化しながらも一貫性を保ち続けている〈ふるまい〉においてのみである」(『デカルト的省察』第52節)。

② 物語認知の基本モデル

フッサールの認識論の哲学的意義はさておき、ここに描かれた構図を物語認知のモデルとして再解釈してみると、およそ次のようなものとなる。

(i) 断片と世界の同時認知

私がある記号断片を物語内の対象として認知するとき、私はそこに同時に、その対象が属する世界を認知している。

(ii) 物語的他者への自己移入

この世界は、私とは異なる視点から世界を見ている他者への自己同化によって「ひとつの世界」として「現れる」。自己同化とは、他者の身体を発見し、そこを宛先として類比的に自己を移し入れることである。

(iii) 自己移入の手がかりとしての「ふるまい」

自己移入先の身体は、それに帰属するものとして呈示された一貫性のある「ふるまい」において認知される。

(1)で述べたように、物語認知の本質は、受け手が物語世界を随伴する仕方である。そのことは、物語として呈示される一貫性のある「ふるまい」を手がかりとして「物語的他者」へと受け手が自己移入することで可能となる。これが本研究が提起する物語認知の基本モデルである。たとえその手がかりが直線と二点でしかなかったとしても、受け手がそこに自己移入することで、物語が「動き出す」のである。

もちろんこの自己移入は、認識論におけるような根源的で受動的な意識作用ではない。他者の身体や「ふるまい」といった言い方はあくまで比喩であり、問題になっているのは、受け手が「解釈」と「理解」の対象として注意を向ける当のものである。従って着目された「ふるまい」がどのような仕方では知覚され、解釈されるかが、具体的な物語認知のあり方を決定する鍵となる。そこで問題となるのが、「ふるまい」の知覚のされ方を規定するジャンルのないしメディア的な特性である。以下では、上の基本モデルのもとで、物語的他者の「ふるまい」はどう分節化されるかを、具体的に考察する。

(3) 比較ジャンル論的考察

① 物語ジャンルの分類

既に触れたように、メディア論的見地からの物語論研究としてはライアンのもものが重要である。彼女は2004年の編著の中で、「物語性への影響によるメディアのタイプ分類」表を示している(Marie-Laure Ryan (ed.), Narrative across Media, Univ of Nebraska Press, 2004, p.20)。本研究では、この表を参考に新たに次のような分類表を提案した。

一 類像的	二 象徴的	三 記号的	四 言語的	五 身体的	六 時間的
劇(音楽劇を含む)	映画・TV	アニメ	コミック	韻文文学・歌	散文文学
現実的身体知覚	視覚/聴覚/言語	視覚/聴覚/言語	視覚/言語	聴覚/言語	言語
△舞踏等	サイレント映画			口頭での語り	
パフォーマンス	視覚(/言語)			聴覚/言語	
現実的身体知覚		△絵画		△音楽(言語を伴わない)	
△パントマイム		視覚		聴覚	
現実的身体知覚(聴覚を欠く)					

△:必ずしも「物語」性を重要としないジャンル

ライアンはメディアの知覚的特性、特に聴覚/視覚の対比を考慮して「時間/空間」を分類の第一指標とした。しかしそうすると、概念的メディアとしての「言語」の位置づけが曖昧になってしまう。これに対して本研究では、類像的/象徴的という記号それ自体の特性を指標とすることで、現実的身体知覚と言語を両極とする分類を試みた。ライアンが言うように、「メッセージの形式と内容を物質的に支えるものとしてのメディアの重要性に関する包括的で広く受け入れられた理論は存在しない」状況において、こうした試みは、物語論研究へのひとつの寄与をなすものと考えられる。

② 分類の根拠

知覚的現実の再現における直接性の度合いである類像性を分類指標とするのは、本研究におけるモデルが、物語成立の基礎を物語的他者の身体知覚と見なしているからである。最も類像的な再現は、現実の身体的行為に「虚構」のスコープをかけることであり、あらゆる劇、実演のパフォーマンスはその意味で、物語の「原初」的形態である。アリストテレスにおいて、悲劇とその「筋」こそがミメシスの第一の考察対象であるのは、このためである。

言語は、最も象徴的な、つまりそれ自体としては意味がなく解釈を通じて世界と概念的に対応づけられるメディアである。言語は時間的に経験されるものであり、韻文は韻律によって聴覚性を前景化させる。しかし言語の本質は概念的に世界を立ち現れさせる点にあり、その知覚的実質性に焦点を当てるケースとは区別が必要である。この点では、ライアンの表よりも本研究の分類の方が識別力を高めていると言える。

もちろん言語は、それぞれの知覚的特性と組み合わせられることで、各ジャンル特有の物

語世界を作り上げる。

③ 記述と描写

ここでの分類では、言語を他の知覚的メディアと並列的に扱う。言い換えれば、言語を「特権的」なものとして扱わない。このことは、「同じ物語」が様々なメディアで表現されると言われる場合のその「同じ物語」は「言語的」なものではないのか、という従来から問われていた問題へのひとつの回答である。本研究の見るところ、これは記述と描写の混同からくる誤解である。有名なフォスターによる「プロット」と「ストーリー」の区別は、出来事の「記述」のうち因果関係が含まれるかどうかという意味論的な違いに基づくものであるが、出来事の「描写・呈示」という観点から見れば、受け手が理由の連鎖を含まない純粋な出来事連鎖として物語世界を表象することは通常ありえない。物語的他者は、メディアを用いて出来事を「描写・呈示」する。「同じ出来事」であっても、その描写の可能性は無限に多様であり、この点は言語であろうと他の知覚メディアであろうと違いがない。ただ描写された出来事を「命題」へと落とし込む際には、記述のための「言語」を使用せざるをえない。しかし認知的観点から重要なのは、描写としての言語がそのつどどのように解釈・受容されるかである。記述と描写を区別することで、知覚が言語に従属するものではないこと、メディアの差異が物語そのものの違いを生み出すことが示される。

(4) 物語分析カテゴリーの再解釈——物語的他者の「ふるまい」

(3)で提案した分類表は、全体の見取り図としては有益だが、実際の物語認知とジャンルとの関連はさらに複雑なものであり、その細部は、「筋」「語り手」「人物」といった伝統的な物語分析のカテゴリーに沿った検討によって明らかにしなければならない。この解明は、基本モデルにおける物語的他者の「ふるまい」の具体相を示すことにほかならない。

① 筋

例えば劇において出来事が演技者の行為によって示されるとき、演技者は仮面・身振り・韻律的言語などを虚構性の手がかりとして呈示している。これが慣習化することによって、劇というジャンルが文化制度的に確立する。同様のことは他のジャンルについても言える。筋一般に関しては、ハーマンが物語の特徴(c)で挙げた「断裂・混乱」(disruption)、つまりアリストテレスが「逆転と認知」と呼んだ受け手の予想を逸脱し「驚き」をもたらす設定が、物語にとって重要である点に着目

する必要がある。なぜならこれは、物語認知が既知の表象パターンを越えた新しさの経験という一面を持つこと、その意味でまさに「他者」の視点の経験であることを示しているからである。

② 類像性と表情

類像性という点から見ると、劇以外の視覚メディアは表現それ自体が何がしか象徴的である点で共通する。しかし他方で、映画や写真は、現実の被写体に「依存」する点で劇に近いとも言える。これらのジャンルでは、「実物」の身体や事物の持つ「表情」が、場合によっては演出的コントロールを逸脱するような余剰性をはらみ、それが特に情動的な効果を生むことに留意しなければならない。もちろんこの情動は、人間が現実において持つ表情知覚能力が再現の理解においても働くことを利用しているものであり、あくまで物語世界の枠内で機能する効果である。情動的効果の起源を物語的他者に帰属させることによって、「悲劇の快」の問題の説明も可能になる。

③ 視覚フレーム

各ジャンルは物語世界の「境界」を明示するフレームを持つ。劇の場合は演技者の身体的行為の全体が、叙事文学の場合は語り手による「言語」の挙動がそれである。他方、コミック・映画等のジャンルでは、画像を縁取る「視覚フレーム」という目に見える境界が存在する。コミックや映画において「語り手」が明瞭に意識されない（される必要がない）のは、視覚フレームが、擬似人格的な語り手を代替しているからであると考えられる。

④ 人物

物語的他者は、語り手や視覚フレームのような物語全体を輪郭づける外枠の内部で、行為する人物を描写する。人物はそれ自身の視点を持ちうるから、受け手は容易にその視点へも自己移入する。外枠的視点は内部の人物視点に対して、様々な距離を取り描写の様態を切り替える（例えば、文学における語りの「焦点化」）。これによって受け手の印象も変化する。こうした切り替えは物語の推移の具体相を形成する上で重要な要因である。ただし、「誰が見ているか」と「誰が語っているか」の識別（ジュネット）は常に明示的であるわけではない。むしろ受け手は、基本的に外枠の視点に誘導されて物語を経験するので、内部的視点の変化の細部については「無頓着」でいることができる。最初に述べたように、物語認知にとって重要なのは、記号断片（例えば人物）を介して物語世界が表象されることであり、その意味で「内面」と「世界」がひとつのものとして経験される場所

にこそ物語認知の本質がある。

本研究によって得られた知見の概要は以上の通りである。更なる詳細については、森本浩一「物語認知の比較ジャンル論的考察——物語的他者への自己移入という観点から——」（森田直子（東北大学大学院情報科学研究科）編『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008 年度』，2009 年，121～145 頁）を参照されたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①森本浩一，「物語認知の比較ジャンル論的考察——物語的他者への自己移入という観点から——」，『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度』，査読無し，2009年，121～145頁

②森本浩一，「表現によって現れ出るもの」，『ナラティブ・メディア研究会第 1 回ワークショップ報告書：コミック研究のフレーム再考のために』，査読無し，2008 年，61～67 頁

③森本浩一，「知覚のリアリティー——『芸術としての力への意志』に見るハイデガーの芸術哲学——」，『東北大学文学研究科研究年報』，査読無し，第 56 号，2006 年，206～230 頁

〔図書〕（計 1 件）

①栗原隆（編者），森本浩一ほか 17 名共著，東北大学出版会，『芸術の始まる時，尽きる時』，東北大学出版会，2007 年，460 頁（うち 349～371 頁を単独執筆）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森本 浩一 (MORIMOTO KOICHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20182264